2021年
10月

マナ通信

今月のマナ通信は、
◎８月の聖書日課（歴代誌第１・第２）
◎土・日曜日の学び（山上の説教、士師の時代）の感想です。

聖書の学びで山上の説教が取りあげられています。

「まず神の国と神の義を求めなさい。そうすれば、これらのものはすべて、それに加えて与えられます。ですから、明日のことまで心配しなくてよいのです。明日のことは明日が心配します。苦労はその日その日に十分あります。」（**マタイ6:33-34**）

天地創造の神は、まず、天と地を造られ、我々が生活出来るステージとして下さいました。そして大地のちりで人間の形を作り、その鼻にいのちの息を吹き込みました。するといのちが与えられました。神と交わる為の霊を与えて下さったのです。さらに、食するための動物、植物、魚をも用意して下さり、絶滅しないように繁殖能力をも与えて下さいました。特に、人間にはこれら被造物を支配する権限を与えてくださり、人間のもとにおかれました。

しかし人間は取って食べてはならないという園の中央に立つ二本の木のうちの一つ、善悪の知識の木の実を、悪魔のそそのかしにより食べてしまいました。

これは、いかに神に従順であるかを試すためと、善悪は神様が決めるもので、神の領域をおかしてしまったのです。その為、人間は罪に定められ罪人となりました。

この世は悪魔サタンが支配する世です。従って、人間は食べ物、着る物についても欲と不安の為心配し、少しでも多く蓄えようとします。しかし、これらのものが全て人間にとって必要であることは、天の父は知っておられ神が与えて下さるので、サタンの誘惑に惑わされないようにしなさい、と云っています。

神の義とは、神様は「正しく」、「聖く」、「愛」ある方です。不正は見逃しません。必ず罰します。我々は現在の罪ある状態から、義の状態に生まれ変わらなければなりません。残念ながら人間自身にはそんな変化は出来ません。罪からの解放は「死ぬ」しかないのです。

時が満ちて、後にイエス様が十字架に掛かられ、なだめの供え物となられ、我々の罪のため十字架で死んで下さるのです。しかも、イエス様は死を支配する悪魔サタンの牙城を揺るがし、３日後に復活なされました。全知全能の神に出来ないことはありません。従順に託された贖いを完成させたイエス様は死に値しないと父なる神が復活させました。この時、イエス様を信じる我々も神の義を頂いて同時に復活しました。

復活されて、50日間イエス様は旧約聖書に基づき救いについてお教えになりました。その後、昇天されて神の右の座に座っておられます。私たちも、神の子とされ、永遠のいのちをいただき、神の国に籍をおきます。

イエス様が救いの前触れ（予告編）を少しお話になられたのだと思います。しかし、私も重き荷を神にゆだねきれず、自分で背負ってしまいます。神の国と、神の義は既に与えられていることを認め、確信して信仰生活を続けていきたいと思ってます。（畑中伸之）

毎日が涙を流さない日があろうか。感動させられない日があろうか。本当に心が揺り動かされない日はなかった。

パラリンピックを観て動かす手足のない人たちが一生懸命泳いだり走ったりしている。テレビを観て涙を流さない日がありませんでした。日々、あの人たちのひたむきに競争している姿を見て、自分も障害をもっているからです。

一般的には自分の弱点障害を隠そうとしますが、大勢の人の前で障害をものともせず競技に邁進している姿は美しく、尊敬に値する。人の心を打ちます。

そして、自分をパラリンピックの舞台に立たせて下さった人への感謝を忘れない。私はここに神の存在を感じます。神様は手足の不自由な人にはそれに代わる力を与えてくれる。神様に感謝することで一杯です。こういうことは、全て神様がご存じであって全ての人に愛を注いでくださる。神様にありがとうと云わずにはいられない。

自分と戦って勝ち抜いた人たちがテレビに映っている。艱難を乗り越え勝利した人の姿である。その人たちのことを思うとどれだけ自分の心身を鍛えたかはかり知れない努力がみられる。主よ、この人たちに栄光あれと思うばかりである。私たちに勇気と力をどれだけ与えて下さったことでしょう。（畑中千恵子）

求めなさい。そうすれば与えられます。探しなさい。そうすれば見出します。たたきなさい。そうすれば開かれます。だれでも、求める者は受け、探す者は見出し、たたく者には開かれます。……:このように、あなたがたは悪い者であっても、自分の子どもたちには良いものを与えることを知っているのです。それならなおのこと、天におられるあなたがたの父は、ご自分に求める者たちに、良いものを与えてくださらないことがあるでしょうか。」（**マタイ7:7-11**）

〈みことばを味わおう〉で教えられていることですが、ここでは3種類の応答が教えられています。①しつこさに応える友人、②良いものを与える地上の親たち、そして③最善のものを与えてくださる天の父。

後半になればなるほど、しつこさは後方に退き、愛情や信頼が前面に出てきます。しつこい求めということだけならば、主イエスは心の伴わない、しつこく繰り返すだけの祈りをおとがめになりました（**マタイ6:7**）。

私たちの祈りは、親に対する信頼から生まれるものであり、祈りの答えは子に対する愛情から与えられるものです。そして天の父が与えてくださる最善の応答はルカ福音書では「聖霊」と説明されています。私たちの人生を聖書と共に導いてくださる神の臨在こそ、私たちの人生の最高の贈り物なのです、と。とても分かりやすく親切な解説でありました。

私は試練の時に「われらを試みにあわせず、悪より救い出したまえ」（**マタイ6:13**）とひたすら祈りました。その試練には意味があって、その都度、教えられることがありました。

自分がどんなに神様に愛されている者であるのかを悟らせて下さるのは聖霊です。神様が与えて下さった救いの豊かさへと心を導いて下さいました。

マナ通信9月号での広瀬姉妹のお証しのように、キリスト者生活は御言葉を信じ、聖霊による生活なのだと教えられました。主と共にある日々を感謝いたします。（福島三弥子）

歴代誌を読みながら、神様に忠実な王、偶像に走る王、中途半端な王、様々な為政者の生涯を見せて貰いました。

信仰に篤(あつ)い王から必ずしもいい後継の王が現れるわけでもありません。逆に偶像礼拝に明け暮れる王から、主に立ち返る王が現れます。

側近にもよりますが、主の声を聞く　聞き分ける事ができれば、右にも左にも反(そ)れないで、正しい道を歩めるのでしょう。当時の預言者たちの耳ざわりの良い言葉には耳を傾け、不快な言葉には耳をふさぐと、すぐに主から離れてしまいます。その感性を養うために、日々、御言葉に、聞き続けたいと思います。

歴代誌第2　18章33節で変装したイスラエルの王が命を落とす件は、主の御旨は必ず遂げられるということを、再確認いたしました。また罪を犯しても、心から悔い改めたときには、赦されるという、あわれみ深い主に感謝です。（広瀬裕子）

かつて、東海へ福島兄姉が来てくださって、東海近辺に住む姉妹たちを養ってくださっていましたが、それも閉じられ、久しく、交わりが途絶えていました。

昨年の暮れころだったでしょうか、福島兄姉から電話をいただき、その後、ロイドジョンズ兄の「ロマ書講解」と質問、その他を送ってくださるようになりました。私のようなものに心をかけてくださり、感謝に耐えません。

初めは、ロマ書講解にある慰め、励ましに感激し、また、解釈の深さに驚き、引き付けられ、ぐいぐいと吸い込まれるような勢いで読んでいました。ところが、「聖霊のバプテスマ」に至っては解釈の違うグループにいる私にはそのまま受け入れることができず、消化不良に陥ってしまいました。そういうことで、その後の印刷物にはついて行けなくなってしまいました。

しばらくそれが続くうちに、一つの解釈や他の解釈、それぞれが、み言葉から導き出されたものであるので、今は、そのまま置いておくことにしました。

それでやっと、送られてくるものに目を通すことができるようになり、再び、引き込まれるように読みました。

今回のものには、救いの最終目的が、私たちの栄化であるとありました。そして、この世での並大抵でない生活を、栄化を喜んで仰ぎ見つつ生きることができ、そうするなら、今の苦しみも軽い艱難になるとのことが書かれていました。これが私の実際になることを願っています。

また、次の印刷物を心待ちにしています。（高橋美枝）

王は民の願いを聞き入れなかった。神がそう仕向けられたからである。それは、かつてシロ人アヒヤを通してネバテの子ヤロブアムに告げられたことばを主が実現されるためであった。

（Ⅱ歴代誌10:15）

主は預言者アヒヤを通して、ソロモンが自国の繁栄で慢心し主の道を歩まなかった結果として、ソロモンの子から10部族を取り上げ１部族（ユダとベニヤミン）だけ残すとヤロブアムに言いました。このことばの実現のために「神がそう仕向けられた」なら、レハブアムは主の敷いたレールに乗って民の願いを聞かなかったので仕方なかったかというと、そうではないと思います。

レハブアムには、自分が望めば主の道を知って歩む選択肢があったと思います。長い間ソロモンに仕えていた長老たちもいました。

彼は自分の意思で自分の都合の良い方に流れていったのだと思います。彼はソロモン王の罪から来た大きな時代の流れの中にいましたが、その中でも個人的に心がどこへ向いていたかは重要だと思います。

主の道を歩ませて頂いている私たちは幸いです。その恵みを忘れず、心を主に向け続けたいと思います。（永井亮子）

ですから、わたしのこれらのことばを聞いて、それを行う者はみな、岩の上に自分の家を建てた賢い人にたとえることができます。雨が降って洪水が押し寄せ、風が吹いてその家を襲っても、家は倒れませんでした。岩の上に土台が据えられていたからです。」（マタイ7:24-25）

27年前、カナダに帰られる宣教師のメリーさんが、小学3年生の息子一人のために、日曜学校を開いてくださいました。その時、

「賢い人が家を建てた　賢い人が家を建てた　賢い人が家を建てた　雨が降ってきた
雨が降り水が増し　雨が降り水が増し　雨が降り水あふれ　その家は大丈夫…
すべての人よ　信仰の家を　イエスの上に
今建てましょう　イエスの上に　今建てましょう　恵みはくだる…」

と、身振り手振り付きで歌ってくださいました。家を建てる時、畑地にするか、それとも岩地にするか、土台はとても重要だと思います。

それと同じように、我々の信仰の土台も、イエス様を礎としてその上に建て上げられなければなりません。人生の海の嵐が吹き荒れようとも、土台がしっかりしていれば、決して揺れ動くことはありません。主イエスを信じて、ただ、従って歩んでいきたいと願います。（外處トミ）

信仰の　土台を主イエス　その上に
据えて歩むは　堅固な旅路

2021年8月31日

イエスがこれらのことばを語り終えられると、群衆はその教えに驚いた。イエスが、彼らの律法学者たちのようにではなく、権威ある者として教えられたからである。」（マタイ7:28-29）

イエス様は常に権威あるものとして私たちを教え導いてくださいます。今日も私たちに語りかけてくださるイエス様を信頼し、歩んでいきたいです。（外處光歩）

まず神の国と神の義を求めなさい。そうすれば、これらのものはすべて、それに加えて与えられます。ですから、明日のことまで心配しなくてよいのです。明日のことは明日が心配します。苦労はその日その日に十分あります。」（マタイ6:33-34）

日々の生活の中で心配事を抱え、明日のことについて心配し、思い煩いながら生きてしまいます。ですが、日々起こることはすべて神様のご計画の中にあることを覚えます。このみことばをいつも心に留めて、すべてをご存じである神様を信頼し、すべてをゆだねて歩んでいけたら幸いです。（外處結実）

写真は、綺麗な雲を撮ったら偶然トンボが３機写っていた（外処家）

それぞれ自分の行いを吟味しなさい。そうすれば、自分にだけは誇ることができても、ほかの人には誇ることができなくなるでしょう。人はそれぞれ、自分自身の重荷を負うことになるのです。」

（ガラテヤ6:4）

聖書には、「さばいてはいけません。さばかれないためです。」「赦しなさい。そうすれば、赦されます。」と書いてあります。そして、神様は自分自身を誇る者を一番嫌われます。

天使であったサタンが堕落したのも自らを誇り、神様に従いたくなかったからです。ですから、神様から私には自分を誇るところなど何も無く、人をさばく権利も無く、ただ従いなさいと示される日々に感謝します。（外處徳昭）

だれでも、求める者は手に入れ、探す者は見出し、たたく者には開かれます。あなたがたの中で、子どもが魚を求めているのに、魚の代わりに蛇を与えるような父親がいるでしょうか。
卵を求めているのに、サソリを与えるような父親がいるでしょうか。ですから、あなたがたは悪い者であっても、自分の子どもたちには良いものを与えることを知っています。それならなおのこと、天の父はご自分に求める者たちに聖霊を与えてくださいます。」（ルカ11:10-13）

神様は、私たちがパンを求めたのに石を与えるようなお方ではありません。私たちをあざむくようなことは決してなさらないのです。

当時のパンは丸くて平らな形をしていたので、石に似ていました。神様は、私たちが食べ物を求めているのに、食べられない物や食用に適さない物を与えて私たちをあざけるようなことは決してなさいません。

「魚」を求めているのに「蛇」（私たちを滅ぼすような物）を与えたりはなさいません。「卵」を求めているのに「さそり」（耐えがたいほどの痛みをもたらす物）を与えたりはなさいません。

人間の場合でも、父親は悪い物を与えようとはしません。罪深い性質を持っているにもかかわらず、「自分の子どもに」どのようにして「良い物を与える」べきかを知っています。

だから、私たちの「天の父」が、ご自分を「求める人たちに」、喜んで「聖霊」を与えてくださるというのは言うまでもないことです。

私たちが最も必要とするもの、神様が与えたいと一番願っておられるものが聖霊であるということは、重要な意味を持っています。

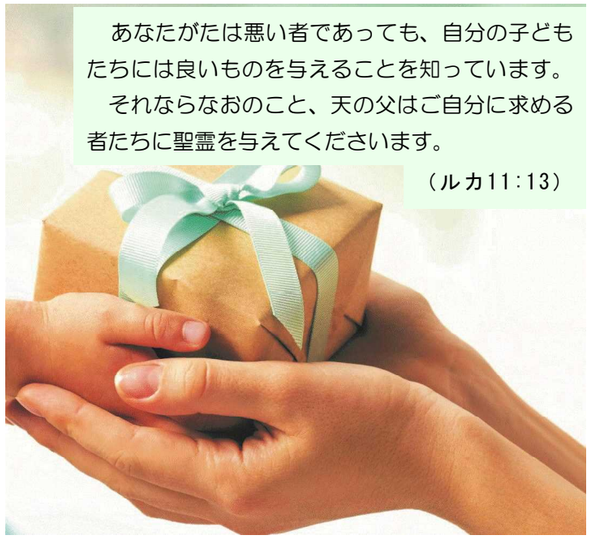
イエス様がこのように話された時、聖霊はまだ与えられていませんでした（ヨハネ7:39）。私たちは今日、聖霊が「内住のお方」として与えられるように祈るべきではありません。私たちが回心した時から、聖霊は私たちの内に住んでおられるからです（ロマ8:9、エペソ1:13-14）。

しかし、聖霊を求めて祈ることは、ある意味で正しいことであり必要なことです。私たちは、聖霊を通して教えられ、聖霊によって導かれるように、また、キリストのためのあらゆる奉仕に聖霊の力が注がれるように祈るべきなのです。

イエス様が弟子たちに「聖霊」を求めよと教えられた時、聖霊そのものではなく、聖霊の力のことを言っておられたと考えたほうが妥当と思います。弟子たちは聖霊の力によって、この世のものではない「弟子としての道」（主がこれまで教えてこられた道）を歩むことができるのです。

すでに弟子たちは、自分の力だけで試練に耐えることなど、とてもできないと感じ始めていたことでしょう。もちろん、その通りです。

「聖霊」こそ、キリスト者として生きることを可能にする力です。イエス様が言われた通り、神は、求める者にこの力を与えようと切に望んでおられるのです。



原語のギリシャ語では、13節の聖霊という言葉には冠詞がついていません。冠詞がある場合は、聖霊そのもののことを言っていますが、冠詞がない場合は、聖霊の賜物や働きのことを言っています。だから、この御言葉は、聖霊そのものを求める祈りというよりもむしろ、聖霊が私たちの生活の中で働かれることを求める祈りと言うことができます。

平行個所であるマタイ7章11節も、このことを裏付けています。「それならなおのこと、天におられるあなたがたの父は、ご自分に求める者たちに、良いもの〔(ギ) δόματα ドーマタ:贈り物／複数形〕を与えてくださらないことがあるでしょうか。」

何と感謝なことでしょう。私たちを助け導いてくださる「聖霊」を求める生活を送らせていただきましょう（福島勲）

貴重なご感想をありがとうございました。
次回はマナ９月号の感想を10月10日頃までに福島兄弟へお寄せ下さい。（永井）